

La Voix nouvelle de la Poésie



叢書新世代の詩人たち8

海の家

栗原俊詩集

叢書新世代の詩人たち 8

海の家

発行 一九九一年八月一〇日

著者 栗原 俊

発行者 笛木利忠

発行所 土曜美術社

〒162 東京都新宿区市谷加賀町二二一四

電話 〇三(三三三五)六七二六

郵便振替 東京七一九九一九一

定価 一七〇〇円 (本体一六五〇円)

印刷 興英文化社

製本 協栄製本

© ISBN 4-88625-311-3 C0392 P1700E



叢書新世代の詩人たち8

海の家

栗原俊詩集

詩集
海の家
目次

きつねのもり 8

伝言 10

遊び時間 13

笑顔 14

父と鷗 16

潮招き 18

ドライブ 20

海沿いの道に下りてみようか 22

密林の話はしませんでした 24

つめたい昼の 26

日の出 28

『わたしが生子もだったころ』を読んで 31

出梅 36

蜥蜴の日から 38

季節への私信 42

林檎 45

電 46

雨のち朝 48

水 50

菖蒲園 52

名前のない色 54

鷗の話 58

水槽に夜を迎える 61

道路に沈む 64

夜の海のクリスマスツリー 68

海の家 72

あとがき 78

海の家

きつねのもり

おふくろのいなり寿司が食べたくなくてね
だからきつねの子を苛めたという兄さん
ぼくなら 神社にお供える

蜷気楼はきつねのもりだ

古い呼び名を大切にする土地では
兄さんきつと

いつまでもないていられるよ
合わせた両掌にひびいてくる

雪や

こんこん あられもひびく

食べられるけど 食事よりまず

風邪に気をつけないといけないと思う

なにしろ森はふかい

きつねの隠れ家はどこにもある

もう引き返そう日の当たる場所へ出ようと焦りながら

いちばんふかく迷いこみ

歩きつづける役目 それをきつねの守りと

呼ぶこともあるそうだ

伝言

少年の午後に

あれは誰との約束だったろう

裸木の肌に空を描いた

空の中に鳥を描いた 白く二羽

一羽は翼に首を埋め

一羽は飛び去った

高い声とともに 空から

樹皮が青く染まらぬうちに

戻ってきたのは木霊ばかり

その声は乾いて 窓辺の

戸棚と椅子に届く

机に届く インク壺が倒れた

二時 子どもが俯いて遊んでいる

季節を数え疲れて 壁の上

冬の日の

うたたねから顔を起こす

いつも通りに

明るんだ庭に水を撒いた

固い土に 忘れられた根に

しなやかな幹に耳を当てると

枝 ゆれている

先までほそく

だから眼も細めて部屋中に

木の言葉をふりかけ

空が育つのを待つことにした
窓にいくつもの
声と音を吊るして

遊び時間

川遊びの最中

小石を食べている魚と眼が合ってしまった
すこしあわてて恥ずかしそうに
こっちへ。

うながされて

あかるい泡をとおって

ぼくは大きな樹の下にながれつく。

こんどは

月のいろした草と遊ぼう

ぼくの影を樹の影のなかに泳がせて遊ぼう。

笑 顔

すまないけど

肉になっておくれ

おまえは次男だから我慢して

そういう母親の前に

一生懸命苦笑しながら

結局ひとこともいえなかった彼

その人の笑顔は

妙にぼくを落ち着かなくさせた

彼がいなくなってから

彼の家族たちは皆

あのときの彼のように笑うようになった

夕食によばれると

彼らは泣きそうな脆い笑いを浮かべ

ぼくにだけ

つやつやした挽き肉の皿を出してくれる